

白史  
 實傳  
 川乃村文庫  
 田端  
 下

遠13  
 1807  
 12



13  
1807  
12

証史  
實傳

文庫卷之十二

江戸 為永春水著

第廿三回

梅澤

あゝあゝと小林平八郎は  
必死を救ひまきと澤浦も  
借財多く親類縁者の  
彼身の上さきさきりり  
野中の井へ身を投て死  
あゝあゝと小林平八郎は  
必死を救ひまきと澤浦も  
借財多く親類縁者の  
彼身の上さきさきりり  
野中の井へ身を投て死

けはるこまがこま小林こまのちを不便ふべんのあひひて 小松こまつへ松まつのまの  
ききねりけん了りょう了りょう分ぶんめを身上しんじやうのさう支しへよう世間せけんのそし  
みごとをみごとぬぐぬぐくを得え今いまも捨すてる覚悟かくごゆつとらしく  
園ゆゑんゆゑんともたまをこめて思おもひ人ひとの一代いちだいの懐なつかし  
室むろのまきが世よの常つねあり一旦いつたん表あらわへようとも再用さいよう運うんの母はは  
まうらさやまうらさ家いえ等らへ今いま表あらわぬの病やまひをやりくまふは拍あし  
木ぎ塚づかへまあうまもま方かた達たちのいのちを救きうふ物もの束たばごと  
ゆてもあつとんは射やようへ程ほど近ちかき高野たかのの下したをあま

住居すまひでり目めが先まへに空くうへあき色いろよト情なさけのる言ことば葉はま  
け決けつ意いもも張はり備びももあつるををあつる直ただ一ひと平へい公こう希きふふけ  
の道みち行ゆくがそのち小林こまが世よ話わを和わ奇き海うみ伊い勢せかとのみ  
鏡師かがみしの名家めいけへ交まじ輝あ養やうひみまへその家いへを継ついで  
け次けつ希き私し奇き海うみ伊い勢せと名なをま養やう父ふ母ははの没な後ごも  
家いえ業ごうまはしくまはしく綴つづ昌あき一ひと條じょう倉くらの諸しよ侯こうへ出で入いと東とうの  
名なをさ鏡師かがみしまうらさ住居すまひの園ゆゑん城じやうの夏なつ坂さか町まちの  
して高野たかの師し直ただの屋や敷しきの門かど希きも在ありける

極月十四日の夜深更及びて義士の面々長村の  
第の高野の家の中周章の中小林平八第の只一人  
あしも稽榎する心いさうしと思ひてあつてもあつ  
非番のまゝ自身の宅に眠りしが物音を聞き驚き  
目を覚まし次第に案みたる娘を起してあまをたゞし  
二番の文を調身押ふ由を戸を蹴破りて踊り出  
被褥を小股に抱へ衆村の人数の透をうらみ編  
若の社の方へいさう兼てかぐけてあけりし傳は

あり一階子と編者の家根へうけをやくも家根へ  
うけ登り忽ち階を片手ゆめを引上げ嬢の外へ投  
掛て被褥を抱き一徑を走りしが此時に義士の  
人いさうち入らぬゆゑに玄關へ押うつらふとあつた  
長家の方へ目もくらむさびらりける又内々加勢の  
辻登り丁番物見もそのはざりけん小林へ伝の古  
くし屋敷を忍び出町をうける和奇鳴仔の軒  
ひら入り戸せらうくと敲きけり折袈家内も眼を

覚しき 伊勢 誰人ぞ 誰人ぞ 誰人ぞ  
眼が覚らば 小林平八郎でござる ともくけし せむけ  
らまそトのめを 同より 兼て 頼ももの 然るも  
こふ一圓の命の 親史婦の 飛記 戸を 明に 平八郎  
月の 兼て 頼ももの 平八郎の 抱一 兼て  
家内へ 平八郎 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
家の 大變 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
由所の 所へ 今 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの

元來 覚悟の 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
母も 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
ものも 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
大りの 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
期のお 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
日向 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
見送り 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの  
くけら 兼て 頼ももの 頼ももの 頼ももの



トりのを流後うしろのまき一七再度またのまきのまき近ちか行ゆける  
階たか子ことかけ登のぼり又も福考こうの社の家根ねより庭の方かたへ  
花はなひりの庭にわをさりて毛けりの形かたち形かたち討うちの人々びと戦ふて家が  
ゆらぬしきの初はつ討うちの形を変へて後のちへともく世よの  
中なかの人情にんじやう義ぎ士しの方かたを具履ぐんふして師直ちか方かたを憎む様  
あの善ぜんを好む悪を捨るの心こころより棄ればらしもののみら  
まども中のあいさらう差さ別べつあるべし不ふ仕し合あひて小こ林りんの高  
野の家け来らるゆゑの義ぎ士しの勝る勝る働きして然も

大丈夫だいぢゆうぶ多たるの約やく状じやう寐ね身みの意の意討うちせうけて心  
周しゆう章ぢやうのももく小こ思しを抱ひて團だんを走枝し飛ひ鳥とりのおもいまし  
身みのまりまり一和わ舟しゆう氏しをあらして引送おつて大だい敵てきをあはしめ  
おのののさだよしき一空くう形かたちの師直ちか方かたの大患わづらひ居いるを四し十じゆう七しち  
勇ゆうに百倍ばいの英勇ゆうありと貴きまさべし  
。斯かくて和舟しゆう海かい伊い勢せの小林りん平へい八はち常じやうの娘を大切せきに  
養やしやうひしが琴浦うらの実ももゆきまされば海うみ更さらに可  
也なりと成長せいぢやうの後けの痕あとの聲反へんより鏡師しの家

業を傳へて家會とちけるが彼娘の實の父上  
林氏の付記と兩親より圖傳人跡さうの火事  
中より我身を助け出して和舟馬の預けらるる  
羨望のあもむきるんを考へて九十余文の書  
保ちて一月もくまらぬりく物の本信友  
紙のふか思居巻の表付の縁がら見る度毎  
款は憤怒てその縁を引破り捨つこと實は小林の  
娘のせい然もゆのぬべきりきんをこれを彼

小林の娘の腹より生まれしをのりてまゝ和  
鴻の家を相続し血脈を東都浮世世師  
名家宗理より稱し女今の名人ハ小林の娘の孫  
當りしとぞ其故も百北七八年以來の宗理の  
実よりその鏡師伊勢の家を傳へ能山町  
の村に在りしがその男子の善死せし他家  
より傳へしとせし今も家々へ報喜言へ何某  
との御鏡師がまゝりとうや如形るれが宗理



としの一画六 小林平八郎の血脈めてまゐらう

まろ生せしめり

亦流塩谷家の浪人の種々の傳説ある中あつたに野子のこ十肉の浪人として海野の奥に在りて日々の風かぜ雅の住居ありけん彼人の筆ふでまゝにまろりとして書かたりを見せりしりあり

世にわづら野の伝説ありとまろ世をわづら見せり  
ての綾羅錦繡金銀珠玉も何れゆめ止るべし

柴門新緑の閑らまて人のこゝろみ  
道もき月より外の友もさけまはひりて  
へん優もさる

○おのひ出らるる一の山のゆめを

こころに神のゆめども見よ

○まろれたる幾百年をほろ人まて

代々みくらねるまろり

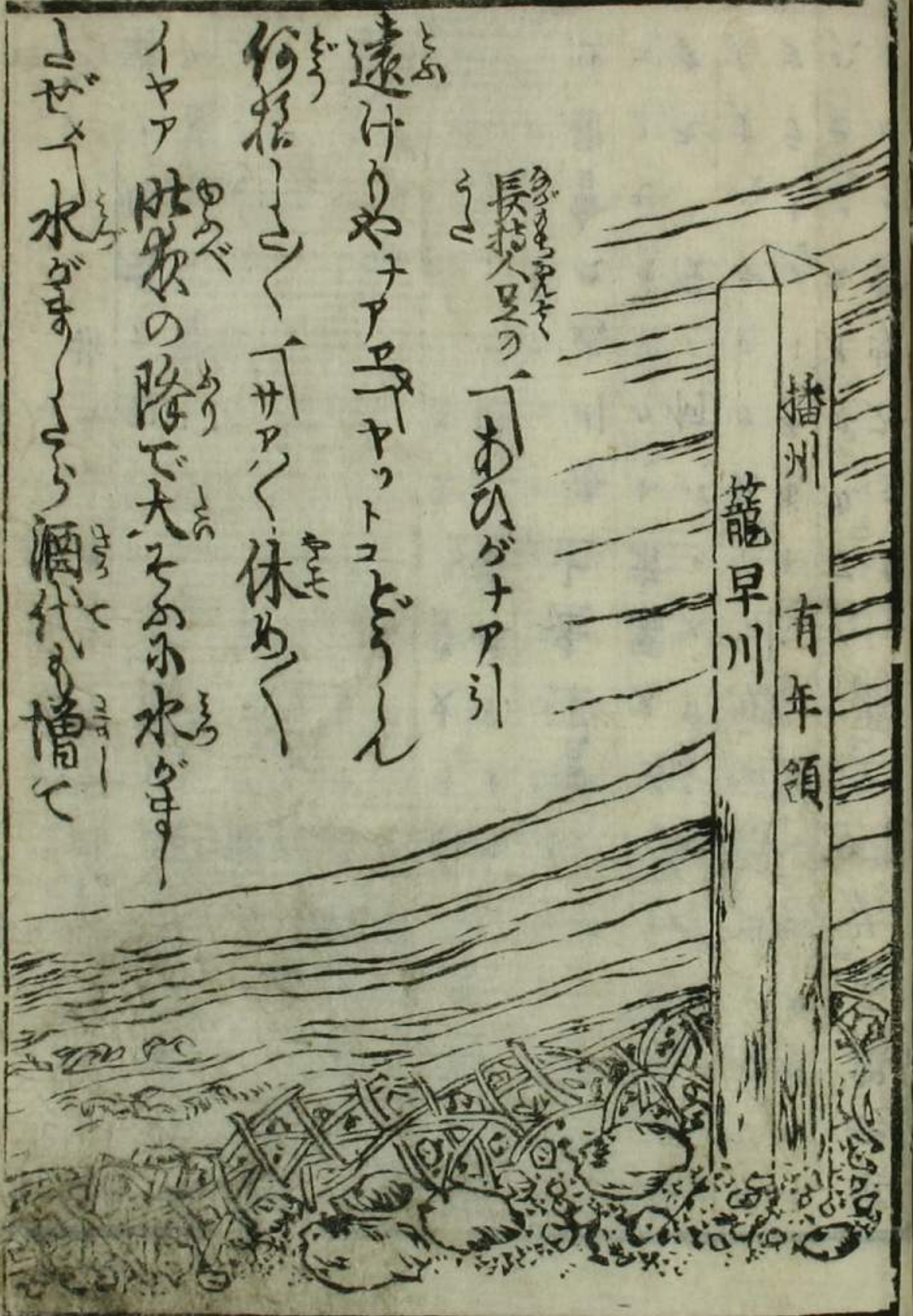
尾をみるら九月の中旬渡海の草屋に立出るとて

秘蔵せし哥ありとぞ

密信義士の功を賞美の余りゆふとふとぞ  
秘蔵せし哥ありとぞ  
秘蔵の由縁あるものなる秘蔵せし哥ありとぞ  
今も尾張の名古伝戸あり桂川の花籠と  
ゆふ室井其角が都立登り一節桂川を渡る折  
うら川流るる物と捨る男の腰小提する小笠籠の尻  
裾よりければ好むの深き晋よりけしむ彼移せ  
その男は酒代せとせせ其のけり東ふりち深うて

花籠の遠用の桂川を求湯する移るればその  
傳ふ名として桂川と傳ひ秘蔵せし哥ありとぞ  
室伝東の名高き晋より其角が風流のありけり  
遺るものなればとせも其頃の多物とあり風  
雅の席の仕草ありとせ茶屋の師匠ありとぞ  
秘蔵せし山田宗伴が其角より乞求り後高野  
師直の方へさう出けしむ彼家ありとせ  
いふしして常伝居るの茶のふととせしとぞ

長持入里の  
 一おのびがナア引  
 遠けりやナアアヤットコト  
 何れとく一サアく休めく  
 イヤア世の降で大そあ水  
 一せ水がま一酒代も憎て



龍早川  
 有年領

龍早川  
 有年領

龍早川  
 有年領

龍早川  
 有年領

龍早川  
 有年領

貫ひ糸ナアアス... 酒代の坊やが川向...  
山み婦人が着るせ... 久日の暮るの早く河を流れて止宿を...  
くモウ一息... 舟の早川...  
もは夜... 早瀬の浪も西へ入相小間近き河原と

うろくして人侍顔の娘と下僕... 小顔見合る花の色... 旅人も途絶へる... 元もよろしく... 川サア娘... ありふれたでる... 一つ一個子も足はる雲助が...

ナ先刺は身がにせうけて... 其方の體で娘はの  
相一重の襟な... 藤原をよまらて...  
うまが又一人が走り出。コトサく其方達ハ不及...  
仕チアうらアぬお早川... 此頃テ六小及ぶ好男ッ  
あるものサアくは身が抱て乳を吞せながら怖く...  
指小そろくと後とてきらふト二人とも小娘を奪ひ  
戦... 娘の怒りま... 五邊んとまるを取らまむ  
法の仕方小佐の男ハ憤然と走りて中へ飛入下男

ヤしくは奴等ア何を仕やうと途方もね女をうり  
と思やうぐらうは奴さんがお供をして居らうア捕でも  
さうて見やアがま合点まるものトふたり早く二  
人の川越を突飛せむを来仕つけ... 喧嘩の...  
残り一聖助川越ども又五六人走り下僕を  
取巻大勢めて敵倒しあるやま... 娘を捕へ...  
上河原の西の林をさうて連杉んとまる其の...  
くる武士の浪人体編は益税拾あいら小聖助ども

ひきと 引捕らへ片端より取て投除娘を救ひて  
下僕をも引起ししりりながら「傍若無人の致さ  
まを當惑でよぶらうらう憎ひ聖助どもが覚悟ひら  
けと白眼付刀の柄の身をとりまじ悪人どもい志を  
みく管散らふ途ちりり娘と下僕ハ危きは難除  
まを嫁しく身をとりまじ侍の赤い襷を風りて娘  
人さぬう存念もせぬが誠亦有がう存念に下僕ハ心  
いやひひんぞんじても只一人の私ハ既ふ主人の娘はを

如くせらるる様とて「まうとと来と君のお敷で必死の難  
を除きまじ」下郎が使侍有がう存念は只今よ  
も主人が有りまじ「うらうらうおれを中上でお宅  
まじも上りまじうあ名前ハ何とを後まじらうお宅  
を成て下まじ「娘」イヤくまじらうまじも後まじらうの  
町守のれハ存念も不守を後まじまじらう娘はの  
付せくはまじや路を急ひでまじらうお宅ハ何と  
うらうママう旅宿へまじらうのまじ一娘ハイ有がうぞんじ



ままにト 之後とも小浪入の舟へおて 支れ糸を繪於姓  
名を尋ねる折も 俄ふ川の向より人妻高く本精の  
空まきワルト下らざき 入足は雲霧の  
四方とりの團も 雲霧の棒先ぬ網を肩中りて  
引如く糸へもれが人足は汗を流して 妻とふコトイサ  
あいにさく 宙を飛ぶる早うち 忽ち川へさき入る  
るが水と蹴とく 押波る後水はびてまゝ一揆同  
おく 妻とけあめて コトイサく 妻のまゝく コトイサト

おま ちりちりとも小浪水と瀧きるが如く 押波るはけ方の  
岸小よりの舟も 舟乗物をさぐ 堰き胸り騒ぐ浪人  
が思ひむかふるおま 妻とけ 浪とちか 早うちい  
右は流つのでいおま ぬらやコト 流さく 不被氏り  
浪 心えな 右は流つのでいおま ぬらやコト 流さく 不被氏り  
せり けねる子か け 掻量あまきヨ 標右流つ百七十一  
里を五日目ゆてもやくも 富所へ必死の津途 隠すも  
あふぬま 君の大妻 委細の夏は 後よりはく 津途



小お笑あま下りあるもあらせむ人足ハ赤穂とさしと  
急ひまきく飛ぶ如く走されば彼浪人ハ心せむとやま  
くあがるおの海を待たぬ川一走り入りなるおの側へ  
大早氏ハ瀨左衛門どの不破備右衛門どのを家の大  
吉ハ如何なる子細何事抄者ハ縁あるがうおせせま  
耳の口候ハ我くもめ覚悟のこ半破も古正の法  
恩を思ひ候ハ及及怒き情さうも徳引提げ

ちがれりとも程を肩小候ハ赤穂ハ後日見集申  
別を告げて瀨左衛門も急物急がせ走せて行く  
今石記ハ大早瀨左衛門系ハ右衛門百七十里の  
行程を五日の日数申馳付由良助ハ津途一  
中お馬を急倒まよと脱りのもあまは官中の喧  
判官不首尾の沙汰をばとひりく競法頃の屋  
お一佐束より尺付百五十兩の金子と精取申は

國をへきかへ途中馬を棄てて走り行由を説くものあり百七十里の遠路を馬の愛つてけらるものありんや後令馬を継ぐりとも人の氣力が尽くべし実の境谷の家へ常の出入の道中清合竹某の方へ海邊の人よりて火の言付その精令人直往同屋場へけり先觸を出して人足せる當をせまより宿次の早急を解ふけさせりとのあり

再説不破林右衛門正種ハ久しき以弟は落家と浪人君恩を報し奉らんと思ひ居りし所は其女の大愛國家滅亡の往途を聞よりも定めて大星をよめ國をの法士一同は勢城必死の心を著るべしと公せき昔後周章の如く彼城を從て同屋へけり川越人足の不法と断り難をばかき遠り届ける程に同屋場の役人由を付其身の別きて浪宅一走り

城申小入りて討死する支度小及ぶを勇くしけは  
 不被探有休が先年例一切の一件して浪人  
 藩倉又主退海宅せし度い世の初らざるものも  
 不破氏の浪人して後志の不度支を志す  
 まがりの度深くされども國元へも帰して居  
 住する近頃されば城中の人々も久しく別  
 きて疎縁さればその心ごとく世にふる人も多  
 小口八十二十七

城申小入りて討死する支度小及ぶを勇くしけは  
 不被探有休が先年例一切の一件して浪人  
 藩倉又主退海宅せし度い世の初らざるものも  
 不破氏の浪人して後志の不度支を志す  
 まがりの度深くされども國元へも帰して居  
 住する近頃されば城中の人々も久しく別  
 きて疎縁さればその心ごとく世にふる人も多  
 城下小入りて討死する支度小及ぶを勇くしけは  
 不被探有休が先年例一切の一件して浪人  
 藩倉又主退海宅せし度い世の初らざるものも  
 不破氏の浪人して後志の不度支を志す  
 まがりの度深くされども國元へも帰して居  
 住する近頃されば城中の人々も久しく別  
 きて疎縁さればその心ごとく世にふる人も多

正史 寶傳 いろは 文庫 卷十三

梅澤

江戸

為永春水撰

江戸

溪齋英泉畫

南總里見軍記

繪入實錄  
全本十卷

十杉傳第五編

五冊  
終久延澤の  
為年ハお違々  
賣

春色

狂訓亭作  
国画直画

中形人清本  
六冊出来仕

明治元年  
辰十二月来之

久榮堂  
耕月

